



TITLE:

# 經濟學の認識主觀としての實踐哲學者 (新年特別號)

AUTHOR(S):

石川, 興二

---

CITATION:

石川, 興二. 經濟學の認識主觀としての實踐哲學者 (新年特別號). 經濟論叢 1932, 34(1): 237-261

ISSUE DATE:

1932-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130124>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號 一 第

卷四十三第

行發日一月一年七和昭

## 新年特別號

非募債主義の考察……………	法學博士 神戸 正雄
精神科學の新分類論吟味……………	文學博士 米田庄太郎
景氣に於ける勢力の作用……………	文學博士 高田 保馬
穀物專賣論……………	經濟學士 八木芳之助
會計學の本質と其の問題……………	經濟學士 蜷川 虎三
長期景氣波動の研究……………	經濟學士 柴田 敬
魚 食 論……………	法學博士 財部 靜治
經營經濟學に於ける認識目的の規範者……………	經濟學士 大塚 一朗
貨幣價值安定 <small>けるより見</small> クレヂット <small>に就いて</small> ……………	經濟學士 松岡 孝兒
徳川時代諸藩の國產會所に就いて……………	經濟學士 堀江 保藏
商人排除の傾向に就て……………	經濟學士 谷口 吉彦
經濟學の認識主觀 <small>とし</small> 實踐哲學者……………	經濟學博士 石川 興二
土佐藩に於ける育子令に就て……………	經濟學博士 本庄榮治郎
企業の競争……………	經濟學博士 小島昌太郎
英米の所得稅……………	經濟學博士 沙見 三郎
新着外國經濟雜誌主要論題……………	

# 經濟學の認識主觀としての實踐哲學者

石 川 興 二

## 一、序

實踐的な力を有する經濟學は常に實踐哲學と離る可らざる關係に立つものである。我々は現に我國の實踐哲學を求めると共に此上に打立てられたる經濟學を求めつつあるのであつて、斯くの如き經濟學のみが我國現代の困難なる社會問題を眞に解決し得る經濟學であると云ふことが出来るであらう。

今翻つて經濟學史を顧みんに、經濟學史上の最も偉大なる人々は社會變革の時期に現はれ、この社會を變革せんとした實踐哲學者であつたと云ふことが出来る。經濟學に初めて學的基礎を與へたる經濟學祖アリストテレスは古代ギリシヤの社會の崩解期に於て其社會を變革せんとした實踐哲學者であつた。<sup>1)</sup> また經濟學を一科の精神科學として確立した經濟學父アダム・スミスは尙ほ中世的なりし當時の社會が近世的なる社會へ展開せんとする時期に於て此中世的なる社會を近世的なる社會へと變革せんとした實踐哲學者であつた。<sup>2)</sup> また資本主義社會の經濟學を打立てしマ

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』(弘文堂刊行)第二篇、第一章參照。  
2) 同書、第三篇、第一章。

ルクスは此資本主義社會の變革の時期に於て此資本主義社會を變革せんとせし實踐哲學者であつた。即ち此等經濟學史上の偉人は人生價值のより十分なる實現の爲に必要な經濟的社會狀態を將來せんとする共通なる實踐的課題によつて互に結ばれ、而もこの共通なる課題を異なる歴史的社會的事情の下に於て解決せんとすることによつて相異なれる經濟學を打立てたのである。かくて此等の人々の經濟學はその基礎をなせる實踐哲學者としての立場に立つことによつて初めてこれを根本的に理解し得ることとなるものである。而して此經濟學の根柢をなす實踐哲學者としての立場は此等の人々を相互に結ぶことによつて初めてこれを十分に理解し得るものである。私は既にアリストテレスとアダム・スミスとについては一應かくの如き立場よりの考察をなしたるが故に、茲にはマルクスを中心として「經濟學の認識主觀としての實踐哲學者」について考察しよう。

## 二、マルクスの哲學的立場と『生の哲學』

實踐哲學者としてのマルクスを理解する爲には彼をアリストテレスとの關係に於てまたアリストテレスを祖とする現代の『生の哲學』に結んで考察することが甚だ重要なのである。

ギリシヤ哲學に於てプラトンのイデヤを感性的なる存在の中に認めんとせしアリストテレスはソフィストの唯物論とこれに對立するプラトンの觀念論とを止揚して眞の實在論的立場に立たんとしたと云ふことが出來るとすれば、同様にマルクスは彼の所謂「舊き唯物論」(十八世紀的並に

フオイエルバッハ的唯物論」とこれに對立するヘーゲルの觀念論とを止揚して眞の實在論的立場に立たんとしたと云ふことが出来るであらう。即ちマルクスはヘーゲルの辯證法をとりてこれを大いに重じたと雖も其觀念論的立場を非なりとすると共にまた彼が一度其上に立ちし「舊き唯物論」の立場に止まることを得ずして遂に彼自身の立場を打立てたのであつて、此點に於て彼と相通する哲學的立場に立てるアリストテレスに強く結ばつたのである。彼は此立場を「新しき唯物論」と名づけたれども、それは所謂唯物論ではなくしてむしろ唯物論と觀念論とを止揚せし眞の實在論的立場であつたのである。而して觀念論者は空想主義者となり唯物論者は宿命論者となるのであるが、此兩者を止揚せし實在論者のみが觀念を感性的存在の中に實現して行く人間の實踐なるものを重んじ以て眞に實踐哲學者たることを得るのである。<sup>1)</sup>マルクスは彼自身の此哲學的立場の自覺を『フオイエルバッハのテーゼ』に於て簡明に述べて居るが故に我々はこれより始めて實踐哲學者としてのマルクスの立場を見ようと思ふ。而してかくの如き方向に於てマルクスは、同じくヘーゲルの形而上學的立場を歴史的社會的實在の中に引き下して考へんとするデイルタイを中心とするところの現代の『生の哲學』に結ばりかくてまた現代哲學に對して重要なる意義を有することとなるのである。

マルクスは先づ曰く「從來の凡ての唯物論(フオイエルバッハのも含めて)の主要な缺陷は、對象、現實、感性がただ客體または直感の形式のものにと捉へられて、感性的、人間的活動、實踐

1) 拙著 第一二二頁以下參照。

2) Warx-Eugels Archiv. I. S. 227. 以下 邦譯マルクスニエンゲルス全集第15卷第313頁以下。

として捉へられず、主體的に捉へられなかつたことである。」即ちここにマルクスは人間の本性をもつて感性的な實在に働きかけこれを變化せしむるところの「感性的・人間的活動」*sinnlich-menschliche Tätigkeit* として把握して居るのである。この點に於ても我々はマルクスとデイルタイとの類似を見る。即ち既述せし如く<sup>1)</sup>デイルタイは人間を以て自然的並に歴史的實在の中に *psychophysische Lebenseinheit* 身心統一體として生れ出て、而してこの實在により規定されながら、而もこの實在に對して働きかける實踐的存在者として把握したのである。故に彼は人間を單に表象する存在として把握することを非なりとして、*das vollendend fühlend vorstellende Wesen* 意志し感情し表象する存在即ち *Ganze Menschennatur* 全人間性に於いて把握すべしとするのである。<sup>2)</sup>

マルクスに於ては人間の本質をもつてかくの如き「感性的・人間的活動」として把握して居るのであつて、自然的實在に働きかけこれを變化するところの活動も社會的實在に働きかけこれを變化するところの活動も共にかくの如き實踐的活動であるとするのである。更に彼は曰く、フォイエールは人間的活動自身をかくの如き對象的活動として捉へて居ないから「革命的な實踐的・批判的活動の意義を把握して居ないのである。」と述べて居るが、ここに「革命的な活動」又は「實踐的・批判的な活動」と云へるものは社會を對象としこれを變革せんとする活動であつて、これに對して彼が其經濟學に於て主要なる課題として居る「勞働」即經濟的生産的勞働なるものは自然的實在を對象としてこれを變化するところの活動である。人間的活動をかくの如くその對象の自然的

1) 雜誌第三十三卷、第二號、第三五頁以下參照。  
2) 但しマルクスは人間の意志性を重んずるがデイルタイに於ける程感情性を重んずる。今主として人間の實踐性を問題とする。

ると社會なることによつて分つ區別は正にアリストテレスの *Techné* 術と *Praxis* 實踐的理性との別に相應するものであると云ふことが出来るであらう。即アリストテレスに於て兩者は共に人間の實踐的な活動に必要な知識を得る能力であるが、自然より人間にとつて有用なる物を作成する人例へば經濟的生産者又は藝術的生産者の有する能力は前者であり、人間社會に働きかけこれを善なる人生に適せしめんとする實踐哲學者の有する能力は後者なのである。<sup>1)</sup> かくてまた「實踐」なる語は、本來はマルクスが「實踐的・批判的活動」と云へるところの人間社會を對象とする人間的活動について用ひらるべき語であらう。而して此意味に於ける實踐が此『フォイエルバッハのテーゼ』に於てマルクスが特に力説してゐるところのものである。かくて彼は進んで所謂唯物論者に對して次の如く述べて居る。

「環境と教育との變化に關する唯物論的學説は、環境が人間によつて變化されねばならぬこと及び教育者自身が教育されねばならぬことを忘れて居る。」即ちマルクスは所謂唯物論者の如くに人間が環境より規定されることを認むると共に進んで此人間が此環境を變化するところの人間の實踐を重じて居るのである。更に彼は環境の力と共に教育の力を重じて居るのであつて、此點に於ても彼は單なる唯物論者でないのである。彼は社會變革の力としても物的な要素と共に意識的な要素を常に重じてゐるのである。<sup>2)</sup> かくてマルクスは人間が變化されんが爲には人間の環境が變化されねばならぬと共に教育者が教育されねばならぬとするのである。此等の點に於ても彼はギ

1) Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, 1410<sup>a</sup> 以下參照。

2) マルクスは資本主義社會變革の物的要素として社會化されたる生産手段を而して意識的要素として勞働者階級の自覺を重んずる。

リシャ以來の偉大な實踐哲學者達と變らないのである。而して後に詳にするが如く、彼は非人間化されたる人間を眞の人間たらしめんが爲に環境を變革し教育者を教育することを以て彼の一生の使命としたのである。

かくて彼は曰く、「靜觀的唯物論、即ち感性を實踐的活動として把握しない唯物論がそれに到達する最高なるものは、市民社會に於ける個々の個人の直觀である。」「舊き唯物論の立場は市民社會であり、新しきその立場は人間的社會または社會的人類である。」と述べて居る。後に詳にするが如く、マルクスは此市民社會と人間社會との關係を次の如くに考へたのである。市民社會即ち資本主義社會はそこに於て人間の意識が物質的諸勢力によつて自然必然的に支配せられる自然必然の社會であるが、此社會は資本主義社會と共に終りをづけ、以て人間の意識が諸勢力を意識的に統制するところの自由な「人間的社會」即ち「自由の王國」が始まると考へたのである。從つてマルクスが茲に新しき唯物論の立場は人間社會であると云へるは意識が社會的存在を決定する立場と云ふことである。かくてマルクスに於ては眞の哲學的立場なるものは既に自覺した人間の立場であつて社會的存在の本質構造を意識しこれに基いてこの社會を意識的に支配するところのものなのである。即ち彼は次の如くに述べてゐる。

「哲學者は世界を種々に解釋して來ただけである。世界を變革する *Welt zu verändern* ことが肝要である。」「即ちここに實踐哲學者としての彼の立場が端的に述べられて居るのである。即ち眞



の哲學者なるものは世界に對して單に靜觀的な態度に於て對して居るものではなくして世界を實踐的に變革せんとする者でなくてはならぬのである。

かくの如き實踐哲學者的態度はギリシヤ以來の偉大な實踐哲學者達に於て等しく見られるところであり、アリストテレスの實踐理性なるものも既にかくの如き立場の自覺であることは前述せしところに於て知らるるであらう。只だマルクスに於ては斯くの如き實踐的立場が眞の哲學的立場として最も強き自覺に高められたのである。而して生、實踐的、本質に、即して生を、把握し、生を、變革せんとする今日の『生の哲學』もまた此立場に立つところのものである。かくてマルクスは、アリストテレス、アダム・スミス、デイルタイ等と同じく『生の哲學者』であると云ふことが出来るのである。かくて今日の哲學もまた眞の哲學的立場として斯の如き實踐的自覺の立場を求めつつあると云ふことが出来る。

マルクスはかくの如き實踐的自覺の立場に立つて彼の經濟學を打立てたのであるが故に、かくの如き實踐哲學者が彼の經濟學の認識主觀であつたのである。デイルタイもかくの如き實踐的態度に於て眞の哲學者の立場と共にまた眞の精神科學者の立場の存することを主張してゐる。即ちデイルタイは曰く、「ロック、ヒューム、カントの構成した認識主觀の血管の中には眞實の血液でなくして單なる思惟活動性としての理性の薄められたる液が流れてゐる」が自分は意志し感情し表象する存在を以て即ち全人間性をもつて哲學の認識主觀とする。「我々が總て哲學に向けねば

ならぬ問題」はこの立場に於て答へ得る。ディルタイはかくの如くに述べてゐると共に更に「精神諸科學の中に於て働いて居るところの把握能力は全人である。精神科學に於ける偉大なる業績は智性の單なる強さより出て來るのではなくして、人格的生命の力強さより出て來るのである。……此精神的活動に對しては價值判斷、理想、方策、規制に於ける實踐的傾向が結び付けられて居る」<sup>1)</sup>と述べて居る。事實我々は經濟學史上の偉大なる業績がアリストテレス、アダム・スミス、マルクスの如き優れたる實踐哲學者を待つて初めてなされたることを見るのである。かくてマルクスが認識主觀の實踐性を最も明に自覺するに至つたことは没す可からざる功績であると云はねばならぬ。

### 三、マルクスに於ける實踐の構造と實踐哲學の課題

かくの如くマルクスは世界を變革せんとする實踐哲學者の立場に立つて彼の經濟學を打立てたのであるが故にこの實踐哲學者としての彼の立場を具體的に知ることによつて彼の經濟學は初めて十分にこれを理解し得るものとなるのである。而して此實踐哲學者としての具體的立場を知らんとせば先づ世界を變革せんとする實踐の構造とこれが爲めの哲學的課題とを明かにして置かねばならない。ここに觀念論と唯物論とを止揚せんとするマルクスの立場が更に明かにされる。

マルクスに於ては世界を變革せんとする實踐は實踐の一種であつて、實踐とは感性的な實在に

1) Dilthey, Ges. Schrif. I. S. 38.

働きかけこれを變化せしむる感性人間的活動であることは既に述べたのであるが、この感性的人間的活動の最も本源的な而して最も基礎的なものは自然的實在を對象とするところの經濟的生產行爲であると考へられたのである。(註二) 而してこの實踐の構造を彼は『資本論』第一卷の中に次の如く分析して居るのである。「蜘蛛は織工のそれに類似した作業を行ひ、蜂はその蜂窩の建築によつて多くの人間の建築師を慚愧せしめる。然し最も拙劣な建築師をして最初から最も巧妙な蜂に卓越せしめるところのものは、人間の建築師は蜂窩を蠟で建築する以前にすでに彼の頭のうちに建築してゐることである。勞働過程の終りには、その始めに際しすでに勞働者の表象のうちに、從つて觀念的に、存在してゐたものが結果として出てくる。彼はたゞ自然的なものの形態變化を惹き起すだけではない、彼は自然的なるもののうちに同時に彼の目的を——それは彼の意識してゐるところの彼の行爲の様式及び仕方を法則として規定するところの——そしてそれは彼れが自己の意志を從屬せしめねばならぬところの彼の目的を——實現するのである」<sup>1)</sup> 即ち人間の勞働なるものは、無意識的合目的なる動物の働とは異つて意識的な合目的な活動であり、これによつて豫め人間の心中に觀念的に在る目的が勞働手段を通じて對象の上に實現し對象を變化する。かくて「勞働過程の簡單なる諸契機は、一、合目的な活動そのもの、二、勞働が働きかけるところの對象、および三、勞働がそれを通じて作用する手段である」而して「勞働手段とは、勞働者が自分と勞働對象との間に押入れるところの、そして勞働者のためには彼の活動を其對象に傳へ

1) Marx, Das Kapital I. von Kautsky S. S. 133-4. 河上, 宮川譯, 『資本論』第一卷・上冊・第五〇〇一五〇一頁.

る導體として役立つところ一つの物または諸物の複合體である。労働者は、諸々の物を他の物の上に權力手段として彼の目的通りに作用せしめるためそれ等の物の……諸屬性を利用するのである。」「要するに労働過程に於ては、人間労働が、最初から意圖されて居た労働對象の變化を、労働手段を通じて惹き起すのである。」<sup>1)</sup>

(註一)「最初の歴史的行為は、此等の欲望を満足する手段の生産、即ち物質的生活そのもの、生産である。しかもこれは人間の命だけをつなぐために、今日も尚ほ、數千年前と同様に、日々刻々遂行されねばならぬ一つの歴史的行為であり、日々刻々充足されねばならぬ一切の歴史の一つの根本條件である。」<sup>2)</sup>

此實踐の構造の分析はアリストテレスが『第一哲學』に於て人間活動による生成の構造を自然界に於ける生成と區別して前者を意識的な成生であり、後者を無意識的な生成であるとなし、其構造を説明せしところとよく一致するのである。而して前者の構造に就て次の如くに述べてゐる。「技術からはその形相が技術者の心にある物が結果する……然らば健康な人は以下の如き思惟の連鎖の結果として生産される。即ち此事(例へば自體の平衡な狀態)が健康であるが故に、其人が健康にならねばならぬとするならば第一に此事が存在しなければならぬ此事が存在するが爲めには體温がなければならぬ。かくして醫者は彼が自ら行ひ得る最後の段階(例へば醫者が摩擦によつて體温を與へ得ること)に到るまで思惟を進める。然る後此點より上方への過程、即ち健康への過程は成作と云はれる。それ故に或意味に於ては健康は健康より、素材ある健康が成るのである。生産又は行動について一部分は思惟と呼ばれ他の部分は成作である。即ち出發點たる

1) Ibid. S. 136. 邦譯 第五〇八頁.

2) Marx-Eugeles Archiv. I. S. 245.

形相より進むところのものは思惟であり、而して思惟の最後の段階より出發するところのものは成作である。<sup>3)</sup>即ちここに於ても、マルクスの實踐に於けるが如く、働くところの主體と働きかけられる對象と兩者を媒介する手段とがあつて、主體に於て意識的にある形相が手段を通じて對象に實現され、これを變化するのである。然し、アリストテレスに於ては「思惟の過程」と「實行の過程」とが具體的に考へられ且つ兩者の區別と關係とか明にされて居るのである。即ち「思惟の過程」に於ては實現せらるべき目的の立場より對象が見られ、而して目的を實現する様に内面的目的に結ばれた手段の系列が求められるのであつてこれ實踐的思惟の方法である、かくて思惟の到達せし最後の段階より「實行の過程」は始まり必然的な系列に於て展開し以て形相を實現するのである。

扱て以上の實踐の構造は人間が自然を變化する時の實踐の構造であるのみならずまた世界を變化する實踐に於てもその實踐たるの本質的構造に於ては變りないのである。只だ社會的實踐に於ては合目的な活動の働きかけるところの對象は自然ではなく社會自體であり、従つて合目的な活動が現實せんとするところの形相は社會の形相であり、而してこの形相を現實社會に實現するところの手段たる動力因は複雑なる社會的の諸勢力の複合である。此變革者が此諸勢力を通じて社會に働きかける時ここに彼の抱いて居る新なる社會の形相が現實社會に實現し社會が變革されるのである。而して此「實行の過程」の前に「思惟の過程」がなくてはならぬ。只だ社會的實踐に於て

3) Aristoteles, *Metaphysica*, 1032<sup>b</sup> 以下。此等の點の説明に就いては拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第一一八頁以下參照。

は社會の形相も、これを實現する手段も、またこれがそれに於いて實現せらるべき社會も自然的實踐の場合と比して遙に複雑であり且つ重大である。従つてこれ等のものに關する知識は全體的聯關に於て而して根本的に確立されねばならないのであつて、かくの如き知識の確立が實踐哲學者の研究課題となるのである。即ち社會を變革せんとするものは先づ、如何なる究極目的のために、(目的因)、如何なる所與社會から、(素材因)、如何なる新社會を、(形相因)、如何なる手段によつて、(動力因)實現すべきかを哲學的に究明しなければならぬのである。而してこれを究明する「思惟の過程」がアリストテレスの所謂「實踐理性」の働である。マルクスも社會を變革するが爲には先づ同様の「思惟の過程」に於て實踐哲學の此等の研究課題を究明しなければならなかつたのである。

かくて實踐哲學者の研究課題はアリストテレスに於てもマルクスに於ても同一であるが實踐哲學者たる立場の具體的相違は此等のものに關する見解の相違より來るのである。故にこれ等の點に關するマルクスの見解を明にする時、我々はここに初めてマルクス經濟學の認識主觀としての實踐哲學者の立場を具體的に知ることが出来るのである。而して「マルクスが初めて彼の將來の哲學の基本原理を表明した」と云はるる『獨佛年誌』の中の諸論文に於て、彼は初めて實踐哲學者としての具體的立場を確立したのであるが故に、我々は以下これを中心として實踐哲學者としてのマルクスの立場を具體的に明かにしよう。

アリストテレスの四原因は本來人間的實踐の構造より來るものであり、従つて精神科學の根本範疇たるべきものである。此に對し因果關係は自然科學の根本範疇であるべきである。

#### 四、實踐哲學者としてのマルクスの立場

彼は先づ眼前に「非人間化された世界」を見而してこれを眞の人間の世界に解放しなければならぬと感じたのである。即ち彼は曰く、「舊き世界が俗人に屬すると云ふことは眞實である。……勿論彼俗人が世界の主であるのは、ただ蛆蟲が屍體に蔓る様に、その仲間と共に世界を満たしてゐるからそうであるまでの事だ。それ故に此等の主人達の仲間は何千の奴隷でさへあればいいのであり、それで奴隷の持主共は自由であることを要しない。若し彼等がその土地及び人民を財産として居るために優越的意味で主人と呼ばれるものとすれば、彼等はやはりその人民達に劣らず俗人である。人間それは精神的存在<sup>1)</sup> (das geistige Wesen) であり、自由人であるべきであつた。兩者とも凡人であることを慚しない。……人間の自己感情、即ち自由 (das Selbstgefühl des Menschen, die Freiheit) はこの人間の胸中に於て始めて再び覺醒せらるべきであつたろう。……この感情のみが、この社會を再び人類の最高の目的のための共同體……となすことが出来る<sup>2)</sup>」と述べて居る。ここに我々は人間的自由の爲めに、(目的因)世界を變革し人類を解放せんとするマルクスの強き自由の感情を見る。この強き人道的感情より彼は其一生を人類解放の爲めに捧げ盡したのである。彼はアリストテレス等に於けると同じく人間の價值を以て人間が眞に人間になることであると考

1) Machass von Karl Marx und Friedrich Engels. her Von Meiering. I. S. 365.  
邦譯マルクス＝エンゲルス全集第一卷、第四〇〇——頁。

へたのである。而して人間の本質を精神的存在と考へたるが故にこの人間の精神的能力を自由に發展せしむることを以て人間の眞の價值であると考へた。彼が『ドイチェイデオロギー』に於て人間的自由 (die persönliche Freiheit)<sup>1)</sup>と云ふて居るのもまたこれである。而してこの考へは單に彼の初期の思想たるに止まるものではなく、『資本論』第三卷の『自由の王國』の中に「それ自身目的たる人間的能力の發展」(die menschliche Kraftentwicklung, die sich als Selbstzweck gilt)と云へるも同様な意味である。此實踐の目的因に於て彼はアリストテレス、アダム・スミス等と變はないのである。即ち既に述べたるが如くアリストテレスの實踐哲學の目的因は人間を人間たらしめるところのもの即ち人間善であつたのであり、またスミスの實踐哲學の目的因は「人間の幸福と完成」(the happiness and perfection of a man)であつて、その何れも要するに人間の人間としての本性を完成することに變りないのである。唯だ獨逸理想主義に結ばつたマルクスは、また反動的時代に生きて彼自分も反動の壓迫を受けつつありし彼は、これを「自由」Freiheitなる語を以て現はして居るのである。而して此自由なるものは内面的自由であつて、エンゲルスが『アンティデューリング』の中に必然を自覺することが自由であると云ひし手段<sup>1)</sup>に關する外面的自由とは明に區別することを要する。マルクスは初期に於ては此人間的自由を主として獨逸國民について考へて居たのであるが程なく全人類について考へて居るのである。かくて彼の實踐哲學の目的因は全人類の自由であると云ふことが出来る。後に明にするが如く彼の經濟學の直接の目的因はプロ

1) Marx=Engels Archv. I. S. 386.

2) Umwälzung der Wissenschaft. von Engels S. 112. マルクス = エンゲルス全集、第十二卷、第二九三頁。



レタリアートに階級意識を與へることであるが、而もその究極の目的因は、此彼の實踐哲學の目的因たる全社會、全人類の自由である。

かくて彼は人類全體の自由の爲に非人間化されたる現實世界を人間的なる新なる世界に變革せんとするのであるが、彼はこの新な社會(形相因)が如何なるものであるべきか、また現在の舊社會よりこの新社會に至るべき手段(動力因)の何であるべきかを空想的に獨斷せずこれを此變革せらるべき舊社會即ち現實社會(素材因)の分析の中に求めんとしたのである。即ち曰く「改革家の間に一般的無政府狀態が擴がつてゐるに止まらず、各人ともにどうなるべきかと云ふことについて何等的確な見解をもたない事を自ら告白しなければならぬであらうとは云へ、我々が世界を獨斷的に見込づけずに舊世界の批判の中から始めて新世界を發見しやうとすることは、又正しき新傾向の長所である<sup>1)</sup>」と述べて居る。即ちここに彼は所謂空想社會主義に對して自己を區別して居るのである。而して曰く「未來の構想とあらゆる時代に對して用意周到なる事とが我々の與り知る所でないとするれば、それだけ愈々我々が現在爲し遂げなければならぬ事柄が確實な譯である。私は一切の現存せるものの假借なき批判がそれであると思ふが、この假借なきと云ふのは、批判がその結果に對して虞を感じないと云ふ意味であると共に、現存諸權力との衝突に對してもやはり同じく虞を感じないと云ふ意味である<sup>2)</sup>」と述べて居る。ここに我々は彼が後に『經濟學批判』の序言に於て「科學の入口には、地獄の入口と同じやうに、次の要求が掲げられねばなら

1), 2) Nachlass Marx—Engels I. S. 380. マルクス＝エンゲルス全集、I. 第四〇七頁。

ぬ。『ここに一切の疑惧を棄てねばならぬ、一切の怯懦がここに死なねばならぬ。』とせしと同じ精神を見るのである。

かくて彼は此現實社會を大膽に分析することによつて此社會を非人間化し居る原因を突き留めんとしたのである。非人間化せる社會を人間化せんとせば、先づ此社會を非人間化せる原因を明にしなければならぬ。而して彼はこれを此社會の資本主義的經濟構造に於て見たのである。即ち近代革命は「市民社會の唯物主義 (der Materialismus der bürgerlichen Gesellschaft) の完成であつた。政治的桎梏の徹廢は同時に市民社會の利己的精神 (der egoistische Geist der bürgerlichen Gesellschaft) を束縛してゐた所の紐帶の撤廢であつた。」<sup>1)</sup> かくて社會全體が、ユダヤ主義化され唯物化されたのである。即ち「猶太教の世俗的な基礎は何である乎。實際的要求、利慾である。猶太人の世俗的な禮拜は何であるか。暴利を貪ることである。彼の世俗的な神は何であるか。金錢である。然らばよし！ 暴利と金錢とよりの解放、それ故に實際上の現實の猶太教よりの解放が我々の時代の自己解放である。」<sup>2)</sup>と述べて居る。即ち近代革命は經濟的活動を中世的なる束縛より解放したのであつて、かくて放たれたる自由奔放なる經濟的利益追求の活動は資本主義的社會をもたらし社會全體を物化しするに至つたと考へられたのである。而してここに先づ注意すべきことはマルクスが後に至り更に明確にする所謂「唯物史觀」の考の骨子を既にここに示めして居るのである。即ち「社會の經濟的構造」なるものはその上に一切の人間生活が打立られるところの「真

1) Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie. her. von Kautsky Vorwort. S. LVIII. 河上, 宮川譯, 第七六頁。

2) Nachlass. I. S. 422. マルクス=エンゲルス全集 I. 第一卷, 第四三〇頁。

3) Sbid S. 425—6. 全集 II. 第一卷, 第四三四頁。

實の基礎」(the reale Basis)であつて此「物質的生活の生産の仕方は、社會の、政治の、及び精神的的生活諸過程一般を制約する。」<sup>1)</sup>而して此「經濟的基礎の變動につれ、巨大なる上層建築の總ては、あるひは徐々に、あるひは急速に變革する。」と云ふ唯物史觀の思想が既にここに其骨子に於て見られるのである。かくて世界を變革せんとすればこの社會の經濟的構造を變革しなければならぬこととなるのである。かくの如くマルクスに於ては經濟社會の變革と全社會の變革とが構造的に結ばつて居るのであつて彼が變革せんする本來の對象は社會全體の構造である。これスミス等に於ては見られぬマルクスの特色である。

今此社會の資本主義的な經濟的構造が止揚せらるるならば、此上に立つて居たところの物化する全社會は止揚せられ、かくて「人間社會の前史」は終をつげ人類は人間社會に進み入ることとなるのである。即ち人間社會とは「自由の王國」であつてそれは現實在を分析することによつて哲學者に知られ哲學者の意識に於て社會變革の形相因をなし變革の完成によつて實現せらるることろのものである。マルクスは『資本論』第三卷に於て此「自由の王國」を次の如くに述べてゐる。「自由の王國は、餘儀なき必然と外部的合目的性とに依つて決定される勞働が存在しなくなつた處に、實際初めて開始される。隨つてそれは當然嚴密な意味での物質的生産の彼岸に存在する譯である。……この方面(物質的生産)の自由なるものは、社會化された人類が、相互結合した生産者達が、自然對自然間の代謝機能のための一の盲目的な力に依つてなされる如く支配されることをや

1) Marx. Kritik. S. LV 邦譯第七二頁。

め、これを合理的に規制し彼等の管理の下に置き、最少の力の支出と、彼等自身の人間性に最も相應しき最も適當した諸條件とを以て、この機能を行ふこと以外の處には存し得ない。けれどもそれが必然の國たることには變りがないのである。この必然國の彼岸に、それ自身目的とされる人間的能力の發展が、眞の自由の王國が開始される。けれども、この自由國は、かの必然の國の基礎の上にのみ開花し得るのであつて、勞働日の短縮と云ふことが、その根本條件となつて居る<sup>1)</sup>。即ち資本主義的經濟構造が打破せられ人間の經濟生活が合理化せられるならばこの合理化された經濟的基礎の上に於て、マルクスが社會變革の目的因としたところの「それ自身目的とされる人間的能力の發展」が遂げられるのである。

然らば次に此經濟社會又は市民社會を打破し社會を變革する手段たる動力因は何處に存するか。が現社會の分析に於て明にされねばならぬ。資本主義社會又は市民社會は資本家が支配して居る社會である。故にこれを變革する者は資本家階級を止揚するところのものでなくてはならない。而して此資本家階級を止揚するところのものはこれを止揚することに滿身の關心を有する一群の人々でなければならぬ。マルクスはかかる一群の人々を順々に検討した後に初めてプロレタリアートに於てこれを見出したのである。即ち「解放の積極的可能性は何處に存して居るか、……答は次の如くである。自己を社會爾餘一切の領域より解放すると共に社會の爾餘一切の領域をも解放してやらずには自己を解放することの出来ない様な、それを一言で表せば、人間の完全な喪失

1) Marx, Das Kapital III. 2. (von Engels) S. 335. 改造社版『資本論』第三卷下 第三五八—九頁。

であり随つて只、人間の完全な取戻によつて自分自身を得ることが出来る様な一領域を作り上ることである。斯の如き社會の解消を一の特別な身分としてなすものはプロレタリアートである。<sup>1)</sup>即ちプロレタリアートは資本家階級より直接に極度に壓迫されて居り従つて自己を解放すると共に全體を解放せざるを得ない人々である。茲に彼が、これまでの實踐哲學に於ては面倒を見てやらねばならぬ階級と考へられしプロレタリアートを以てかく「全解放運動の推進機」とせしことは彼の實踐哲學的立場の最も特色ある點であつて「此見解は絶対にマルクスの見地である」<sup>2)</sup>と云はる所以である。而して茲に彼は貴族とブルジョアジイの對立による佛蘭西革命の構造を産業革命の結果として現れし資本家階級とプロレタリアートとの對立に適用し以て資本主義社會の革命の構造を考へて居るのである。而も正統學派經濟學は個人の利己心に訴へて社會の運行を考へたのであるがマルクスはプロレタリアートの階級的利己心に訴へて社會の發展を考へんとせしことも注意すべきである。

而も此プロレタリア階級を眞に解放階級たらしめんが爲にはこれに理論を與へてこれを自覺せしめねばならぬのである。即ち「物質的強力は物質的強力によつて倒されねばならぬ。併し乍ら理論も亦、それが大衆を把握するや否や物質的強力となる」<sup>3)</sup>哲學がプロレタリアートの中にその物質的武器を見出すと等しく、プロレタリアートは哲學の中に彼の精神的武器を見出す<sup>4)</sup>かくて「此解放の頭腦は哲學であり其心臓はプロレタリアートである。哲學はプロレタリアートの止揚

- 1) Nach'ass. I. S. 397. 全集第一卷、第四五四頁。
- 2) リアザノフ著、マルクス・エンゲルス傳、岩版文庫第59頁。
- 3) Nachlass. I. S. 392. 全集第一卷、第四四八頁。
- 4) Ibid. S. 398. 同書第四五五頁。

なくしては實現さるることは出来ないし、プロレタリアートは哲學の實現なくしては自分を止揚することは出来ない。一切の內的條件が充された時に……復活の日はゴールの雄鶏の高鳴きによつて告げられるであらう。<sup>1)</sup>即ちマルクスに於ては、「自由の王國」は自覺せるプロレタリアートにより初めて實現せられるのである。依つて「自由の王國」が實現せられんが爲には、先づプロレタリアートが自覺されねばならぬ。而してこの爲にはプロレタリアートに解放階級としての自覺を與ふところの理論が打立てられねばならぬのである。かくて此理論を打立てることが實踐哲學者としてのマルクスの先づ第一の使命となつたのである。而してこの理論が即ち彼の經濟學及唯物史觀である。かくて『資本論』は資本主義社會を分析しそこにプロレタリアートがブルジョア階級を止揚し「自由の王國」に至るべき機構を明にせんとしたものであり。而して唯物史觀は經濟社會の變革に伴ふ社會全體の變革の構造を示めたものである。

今以上の分析を省るにそれは前述せしアリストテレスの實踐の例に於けると同様なる目的的分析である。即ち彼は人間的自由の社會の實現の爲めに現社會を目的的に分析し、これを物化せる原因を經濟社會に見從つて社會を變革すべき原因を經濟社會の變革に於て見、經濟社會の變革の原因を資本家の止揚に見、資本家止揚の原因を勞働者階級の結成に見、而して勞働者階級結成の原因を其哲學の確立に見たのである。これがアリストテレスの所謂「思惟の過程」なのである。此「思惟の過程」の到達せし最後の段階は哲學の確立であつて、これは彼が社會變革の爲めに直接に

1) 同書同頁。

爲し得べきところのものである。而して此點に「實行の過程」は始まるのである。即ち今この哲學が、打立てられこれが労働者階級に與えられるならば此階級が自覺し、かくて資本家階級を止揚し、ここに「自由の王國」が實現することとなるのである。

かくて明にされしマルクスの實踐哲學者としての立場を一括して云ふならば、人間的自由の爲めに(目的因)、現實の資本主義的社會より(素材因)、「自由の王國」を(形相因)、プロレタリアートと此を自覺せしむべき哲學とによつて(動力因)實現せんとするのである。而して彼の經濟學『資本論』は此實踐哲學者マルクスが此プロレタリアートを自覺せしむる爲めの學として打立たところのものである。

## 五、マルクスの實踐哲學者としての立場のマルクス經濟學

### 理解に對する意義

以上に於て明にせしが如く、マルクスの經濟學はアリストテレス並にアダム・スミス經濟學と同じく、實踐哲學者が實踐哲學の一部として打立てたところのものである。故に此經濟學の理解は、此實踐哲學者としての立場に立つことによつて初めて可能なのである。従つてまたマルクス經濟學の特異性もマルクスの實踐哲學者としての立場の特異性よりのみ初めて理解し得るのである。而してマルクスの實踐哲學者としての立場の決定的なる特異性は、これまで被救済階級と考へられ來りし労働者階級自體を全社會の救済階級であるとした點にあるのである。かくて彼の經

濟學は此プロレタリアートに解放階級としての自覺を與へる爲めに、資本主義社會の中にプロレタリアートが資本家階級を止揚し「自由の王國」に至るべき、而して至らざる可らざる機構の存することを明にせんとしたのである。この立場に立つてマルクス經濟學を理解することは稿を改めてこれをなすこととし、ここにはマルクス經濟學の構造の自然必然的であり而も目的であるところの特異性につき一言するに止めよう。

即ちアリストテレスの實踐學及スキソの經濟學は實踐學的構造を有するのであつて、そこに於ては社會變革の目的因、素材因、形相因、動力因が相互の聯關に於て目的的に考察されて居るのである。即ち實踐哲學なるものは、智識の全體性と根源性を求める哲學の本質より<sup>1)</sup>、全社會について根本的に此等の智識を求め、實踐科學なるものは、この全體的根源的な實踐哲學を前提として一文化領域についてこれ等の智識を求むるのである。而して此文化領域が經濟的領域なる時その實踐科學は實踐學としての經濟學である。かくて實踐哲學の構造は全社會を變革せんが爲の四原因の智識の目的的聯關であり、これに對して實踐經濟學の構造は經濟的文化域を變革するが爲の四原因の智識の目的的聯關である。然るにマルクスに於ては、その經濟學はかくの如き實踐學の目的的構造を有せず、むしろ自然必然的な發展の構造に於て表現されたのである。このことは如何にして理解し得るか。即ちこのことも彼の實踐哲學的立場より初めて理解され得るのである。

1) 哲學の本質は思惟の徹底であり、智識の根據付と聯關付 (Zusammenfassung, Begründung) を求めるものであることはこれを既に明かにせり。(本誌第三十二卷第四號)



既に明にせし如く總て實踐の構造はその「思惟の過程」に於ては目的的分析によつて求めらるる手段の系列であるが、一度求められたるこの手段の系列は「實現の過程」に於ては必然的發展なる系列として實現されるのである。故に今此實踐的智識を「實現の過程」に従つて叙述するならば、それは必然的發展の法則としての形をとることを得るのである。而して勞働者階級に革命階級としての自覺を與へることを目的とするマルクスの經濟學に於ては此手段の系列が「實現の過程」に於て現代資本主義社會より「自由の王國」に至る自然必然的な發展の法則とし叙述されてゐるのである。

かくてまた彼の經濟學に於る自然必然的な發展の表現はこれを單なる生物學的發展の法則と同一視することは出来ないのである。即ち『資本論』に於て叙述されて居る資本主義的な經濟的構造より「自由の王國」の基礎となれる意識的計畫的な合理的經濟的構造に至る自然必然的な系列は前以て「思惟の過程」に於て「自由の王國」實現の立場より資本主義的經濟社會を顧みてこれを目的的に分析して其中に「自由の王國」に至るべき手段の系列を目的に求めたところのものであることを忘れてはならないのである。かくて自然心然的の系列として叙述されしものは實は目的必然の系列である。かくて一見したところ自然必然的な構造をなせる『資本論』の中には至るところ目的の立場の構造が潜んで居るのである。今このことにつき一二の例を揚げて見よう。

即ち實踐哲學者たるマルクスに於ける分析は常に單なる存在の分析ではなく、目的實現の爲め

1) 考し影と關する點は、此及中に、科學的實在があるが、現實の自然科學的實在の生物學を與ふるもの、その系列を調べる。必然的九世紀の生物學と必然的十世紀の生物學とを比較する。求めたところの經濟代表に目的別に、彼の進化を、かくの如くは、マルクスといふは、マヘダーに就ては、

の目的的分析であるが故に、現實社會の分析にあたつて將來社會が分析の定規としてまた其事實の價值批判の標準として働いてゐるのである。而してこのことは單にマルクスに於てのみならず同じく社會を變革せんとせし實踐哲學者スミスの經濟學に於ても見らるのである。即ち當時尙中世的の束縛がなくなかつた經濟社會を經濟的自由の社會即ち彼の所謂「自然的自由の體系」に發展せしめんとせしミスは、この經濟的自由の社會に於て初めて行はるる法則を規準として當時の束縛的な社會を分析し且つこれを價值批判して居ることは既に私が拙著に於て述べたところにより明であらう。例へば自由競争の下に決定せらるる自然價格なるものは「自然的自由の體系」に於て初めて實現せられるところのものであるが、彼はこれを規準として當時の價格決定、勞賃利潤等の決定を分析し且つ批判して居るのである。而してこのことはマルクスに於ても同じく見らるる根本的態度である。今其顯著なる例を現にマルクス經濟理論に關する論爭の中心となれる相對地代論に就て見んに、彼は次の如く述べて居る。「十クオターの現實的生產價格は二百四拾志である。然るにそれは六百志で販賣される……これ即ち資本制生産方法の基礎上に競争を通じて遂行されるところの市場價值による決定であり、斯る決定のため此虚偽な社會的價值 ein falscher sozialer Wert が造り出される。若し、資本制的社會形態が止揚され、社會が意識的且計畫的な協同體として組織されるに至つたと考へるならば、十クオターの小麦は二百四拾志に含まれるところの等量な獨立した勞働時間を代表することになる。社會はこの土地生産物をば、これに含まれ

る現實的勞働時間の二倍半で購買することはないであらう」と述べて居る。即ち生産物がそれに含まれて居る現實的勞働時間を即ち眞實價值を表はすと云ふことは來るべき「自由の王國」に於て初めて實現さるべきことであり現社會に於てはそれはそれに含まれて居る現實的勞働時間の二倍半を表はして居る即ち一倍半の虚偽の社會的價值をその中に含んで居るのである。此現實社會に於ける虚偽の價值と云ふことは將來現實せらるべき眞實價值なるものより見て初めて云はれ得ることである。

以上に於て明なるが如く、實踐學としての經濟學に於ては、その理論的部分のみについて見るも、それは自然科學に於けるとは異なり、そこには其實現が目的とされて居るところの將來的なものが、現實在の全分析を指導し分析の規準となり同時に價值批判の標準として働いて居るのである。即ち前に舉げしデイルタイの語を以てすれば、精神科學に於ける對象把握の「精神的活動に對しては價值判斷、理想、方策、規制に於ける實踐的傾向が結び付けられて居るのである。」かくの如き立場に立つて『資本論』を理解することは其根柢に於て、實踐哲學者としてのマルクスの立場を理解することによりて初めて可能である。而してここには此實踐哲學者としてのマルクスの立場を理解することを問題としたのである。

マルクス經濟學が現代社會の變革に對して及ぼしつゝある異常なる力も、それが單なる自然科學的なものでなく、マルクスの實踐哲學者としての立場の上に成立つて居るものなるが故である。